TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　670語

Pinocchio, Chapter 2

第2章　ゼペットさんと大げんか

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　あやつり人形を作りたいゼペットさんが、木切れをもらいにやってきます。ところが、どこからか「ポレンディーナ！」という声がして、二人のおじいさんは大げんかに……。



Mastro Cherry gives the piece of wood to his friend Geppetto, who takes it to make himself a Marionette that will dance, fence, and turn somersaults.

In that very instant, a loud knock sounded on the door. “Come in,” said the carpenter, not having an atom of strength left with which to stand up.

At the words, the door opened and a dapper little old man came in. His name was Geppetto, but to the boys of the neighborhood he was Polendina,* on account of the wig he always wore which was just the color of yellow corn.

Geppetto had a very bad temper. Woe to the one who called him Polendina! He became as wild as a beast and no one could soothe him.

“Good day, Mastro Antonio,” said Geppetto. “What are you doing on the floor?”

“I am teaching the ants their A B C’s.”

“Good luck to you!”

“What brought you here, friend Geppetto?”

“My legs. And it may flatter you to know, Mastro Antonio, that I have come to you to beg for a favor.”

“Here I am, at your service,” answered the carpenter, raising himself on to his knees.

“This morning a fine idea came to me.”

“Let’s hear it.”

“I thought of making myself a beautiful wooden Marionette. It must be wonderful, one that will be able to dance, fence, and turn somersaults. With it I intend to go around the world, to earn my crust of bread and cup of wine. What do you think of it?”

“Bravo, Polendina!” cried the same tiny voice which came from no one knew where.

On hearing himself called Polendina, Mastro Geppetto turned the color of a red pepper and, facing the carpenter, said to him angrily:

“Why do you insult me?”

“Who is insulting you?”

“You called me Polendina.”

“I did not.”

“I suppose you think I did! Yet I KNOW it was you.”

“No!”

“Yes!”

“No!”

“Yes!”

And growing angrier each moment, they went from words to blows, and finally began to scratch and bite and slap each other.

When the fight was over, Mastro Antonio had Geppetto’s yellow wig in his hands and Geppetto found the carpenter’s curly wig in his mouth.

“Give me back my wig!” shouted Mastro Antonio in a surly voice.

“You return mine and we’ll be friends.”

The two little old men, each with his own wig back on his own head, shook hands and swore to be good friends for the rest of their lives.

“Well then, Mastro Geppetto,” said the carpenter, to show he bore him no ill will, “what is it you want?”

“I want a piece of wood to make a Marionette. Will you give it to me?”

Mastro Antonio, very glad indeed, went immediately to his bench to get the piece of wood which had frightened him so much. But as he was about to give it to his friend, with a violent jerk it slipped out of his hands and hit against poor Geppetto’s thin legs.

“Ah! Is this the gentle way, Mastro Antonio, in which you make your gifts? You have made me almost lame!”

“I swear to you I did not do it!”

“It was I, of course!”

“It’s the fault of this piece of wood.”

“You’re right; but remember you were the one to throw it at my legs.”

“I did not throw it!”

“Liar!”

“Geppetto, do not insult me or I shall call you Polendina.”

“Idiot.”

“Polendina!”

“Donkey!”

“Polendina!”

“Ugly monkey!”

“Polendina!”

On hearing himself called Polendina for the third time, Geppetto lost his head with rage and threw himself upon the carpenter. Then and there they gave each other a sound thrashing.

After this fight, Mastro Antonio had two more scratches on his nose, and Geppetto had two buttons missing from his coat. Thus having settled their accounts, they shook hands and swore to be good friends for the rest of their lives.

Then Geppetto took the fine piece of wood, thanked Mastro Antonio, and limped away toward home.

サクランボ親方は木切れを友だちのゼペットさんにあげます。ゼペットさんは、おどったり、けんのけいこをしたり、とんぼ返りをしたりするあやつり人形を作るつもりです。

ちょうどそのとき、戸をドンドンと強くたたく音がしました。「どうぞ」と大工は言いましたが、立ち上がる力はもうこれっぽっちも残っていませんでした。

その声で戸が開き、こざっぱりした小がらなおじいさんが入ってきました。その人の名前はゼペットさん。でも近所の男の子たちからは「ポレンディーナ」とよばれていました。いつもかぶっているかつらが、黄色いトウモロコシとそっくりの色だったからです。

ゼペットさんは、とてもおこりっぽい人でした。「ポレンディーナ」なんてよんだら、さあたいへん！けもののようにあばれだして、だれにもなだめられませんでした。

「こんにちは、アントニオ親方」とゼペットさんは言いました。「床の上で何をしているんだね？」

「アリたちにABCを教えているのさ。」

「それはごくろうさん！」

「ゼペットさん、何がきみをここへ運んできたんだい？」

「わしの足さ。それからね、アントニオ親方、きみにひとつお願いがあって来たんだ。そう聞けば、きみも悪い気はしないだろう。」

「いいとも、何でも言ってくれ」と大工は答えて、ひざ立ちになりました。

「けさ、すばらしい考えがうかんだんだ。」

「聞かせてくれ。」

「木で、りっぱなあやつり人形を作ろうと思ってね。すばらしい人形でなくちゃいけない。おどったり、けんのけいこをしたり、とんぼ返りをしたりできるやつだ。その人形といっしょに世界中を回って、パンとぶどう酒の一ぱいくらいはかせごうと思うんだ。どう思うかね？」

「いいぞ、ポレンディーナ！」と、どこからともなく、あの小さな声がさけびました。

ポレンディーナとよばれたのを聞いて、ゼペットさんは赤とうがらしのようにまっ赤になり、大工のほうを向いておこって言いました。

「どうしてわしをばかにするんだ？」

「だれがばかにしたって？」

「きみがわしをポレンディーナとよんだじゃないか。」

「よんでないよ。」

「わしがよんだとでも言うつもりか！きみだってことは、ちゃんとわかっているんだぞ。」

「ちがう！」

「ちがわない！」

「ちがう！」

「ちがわない！」

そしてどんどんおこりだし、口げんかからとうとうつかみ合いになって、ひっかいたり、かみついたり、たたき合ったりしはじめました。

けんかが終わってみると、アントニオ親方の手にはゼペットさんの黄色いかつらがあり、ゼペットさんの口には大工のくるくるのかつらがくわえられていました。

「わしのかつらを返せ！」とアントニオ親方がふきげんな声でどなりました。

「きみがわしのを返したら、なかなおりしよう。」

二人の小さなおじいさんは、それぞれ自分のかつらを自分の頭にかぶりなおすと、あく手をして、一生よい友だちでいようとちかい合いました。

「それで、ゼペットさん」と大工は、もうおこっていないことを見せようとして言いました。「ほしいものは何だね？」

「あやつり人形を作るための木がほしいんだ。くれるかい？」

アントニオ親方は大喜びで、すぐに作業台へ行き、自分をあんなにこわがらせたあの木切れを取ってきました。ところが、友だちにわたそうとしたとたん、木切れはぐいっとはげしく親方の手からすべり出て、かわいそうなゼペットさんのやせた足にぶつかりました。

「いたっ！アントニオ親方、これがきみのやさしいおくり物のしかたかね？おかげで足がだめになるところだったぞ！」

「ちかって言うが、わしがやったんじゃない！」

「じゃあ、もちろんわしがやったんだろうよ！」

「この木切れのせいなんだ。」

「そのとおり。でもその木をわしの足に投げつけたのはきみだってことを忘れるな。」

「投げてなんかいない！」

「うそつき！」

「ゼペットさん、わしをばかにするな。さもないとポレンディーナとよぶぞ。」

「まぬけ。」

「ポレンディーナ！」

「ロバ！」

「ポレンディーナ！」

「みっともないサル！」

「ポレンディーナ！」

三回目のポレンディーナを聞くと、ゼペットさんはかんかんにおこって我をわすれ、大工に飛びかかりました。そしてその場で、二人はさんざんなぐり合いました。

このけんかのあと、アントニオ親方の鼻にはひっかき傷が二つふえ、ゼペットさんの上着からはボタンが二つなくなっていました。こうして決着がつくと、二人はあく手をして、一生よい友だちでいようとちかい合いました。

それからゼペットさんはすばらしい木切れを受け取り、アントニオ親方にお礼を言って、足をひきずりながら家へ帰っていきました。

たんご と クイズ　第2章　ゼペットさんと大げんか

wig かつら	**corn** トウモロコシ	**ants** アリ
legs 足	**Marionette** あやつり人形	**red pepper** 赤とうがらし
buttons ボタン	**coat** 上着	

Q1 ゼペットさんがよばれるとおこる、きらいなあだ名は？

① ポレンディーナ　② サクランボ　③ ピノッキオ

Q2 ゼペットさんは木切れで何を作りたかった？

① テーブル　② おどれるあやつり人形　③ いす

Q3 木切れがすべってぶつかったのはどこ？

① アントニオ親方の鼻　② 戸　③ ゼペットさんの足

こたえ

Q1　①　かつらが黄色いトウモロコシの色なので「ポレンディーナ」とよばれていました。そうよばれると、けもののようにあばれました。

Q2　②　おどったり、けんのけいこをしたり、とんぼ返りをしたりできる、りっぱなあやつり人形を作りたかったのです。

Q3　③　わたそうとしたとたん、木切れは親方の手からすべり出て、ゼペットさんのやせた足にぶつかりました。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。